慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	綾部恒雄編『アメリカ民族文化の研究：エスニシティとアイデンティティ』
Sub Title	Tsuneo Ayabe, ed., Studies on American Ethnic Cultures : Ethnicity and Identity
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1983
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.56, No.6 (1983. 6) ,p.126- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19830628-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

綾部恒雄 編『アメリカ民族文化の研究—エスニシティとアイデンティティ』

政治学にあつては、人が集合し結合する契機を、たとえば国民・民族・組織・集団といつたレベルで想定していた。したがつて、そこには、領土とか意識、そして感情や利益が予定されていた。戦後政治学には、人の心意にかかわり、あるいは価値体系を学習する、そうした側面を心理学の手法をかりて追跡する分野もひらけた。たとえば、それらは「社会化」とか「補充」といつた領域で取り扱いを可能にされたといえる。

だが、そうした視座はあくまでも分析的に措定された概念である。つまり、すでにある状況なり現象なりを、分析的に説明することを予定していなければならない。したがつて、そうした分析概念が、政治学の対象とする人間状況の一部にかんして、その有効性をみずから検証することをよぎなくされたのは、当然のことである。

私はこの視角を不毛だと言つているのではない。むしろ、そうして私たちに利用可能になつた知識が、人間たちに共通するポイント、そして人間たちに特異なポイントを明らかにしつつあることを知悉した上で、なお政治学はそこに終わらないことを強調したいのである。それは、政治という人間にとつてのことがらが、国家・民族・組織・集団においてのみ発現することがらでなく、むしろそれらを一方では解体したり、他方ではそれから離脱することで、人間の旧態からもう一つ別の、このごろしばしば使われるキイワードを用いれば、オールタナティブを発見し創造しようとする心意的であり現実的である過程を、人間にそくしたところで把握し、その契機と方向を見定めるところに〝政治の発生〟を見なければならない、とする認識に支えられている。

かつてマルクスは、この人間の歴史創造を意識と生産力とのかかわりとして、人間の歴史的矛盾を発見し、ウェーバーは、情意と倫理によつて、歴史を解放しようとした。それは彼らが、歴史を躍動させる人間の〝時代〟を知的に感受したからであつた。その意味では、私たちの現在もまた、固定化された歴史が流動を開始した〝時代〟ではないだろうか。つまり、私たちの状況は、旧来の人間のたたずまいのもう一つ奥深いところで、何かが動きだしている状況、と読めないだろうか。

もちろん、産業社会を構成していた諸条件がその緊縛度をゆるめた、と見ることは可能である。しかし、その状況をもたらした、そのものはいつたい何なのだろうか。いやむしろそこには、産業社会に人間を結合していた、その環をゆるめる何かしら人間の生存のし

方に大きな変化を許容するだけの本質的な胎動がなければならないはずである。六〇年代から七〇年代にかけての、いわゆる変革への人間噴出は、その歴史的胎動を象徴するものではなかつたか。

※

人間がそれぞれ手を取りあう、つまり関係を結ぶし方は、前述したような既定の制度や既成組織への加入・編入によるばかりではない。たとえば、〝利益〟による結ぼれは、新しい集団や組織をたえずつくりだしている。しかし同時に、国家とか社会は、人間にとつて厳然たる事実であり、それを排除するにたる人間の結ぼれの論理は、常に逸脱であり異端であり、ひいては反国家・反社会として、その正当性を承認されなかつた。それは、法治国家が、今考えられる唯一の人間的論理として、その正当性を確定ずみにしていたからであろう。

言いかえれば、国家への忠誠・社会への忠誠が人間を被覆しつくしており、人間はその限りで、〝国民〟・〝社会人〟として一元的にしか自己規定を許されなかつたはずである。そこに突出された新しい《人間への忠誠》のモメントは、いわば、人間存在の多元性主張であり、人間のさまざまな意相が何ものにも優先する、という思念であつた。つまり、人間は与件としての国家的存在・社会的存在をいつたんは離脱して、人間相互のあいだがらを組みなおすことを考えはじめたのであつた。

それは一方では分離主義を、他方ではより広い統合への方向を示したが、むしろ結ぼれから見れば、より小さな〝範囲〟を志向している。それはむしろ、人間一人ひとりが、何によつて生きるか、何のために生きるか、の原点をみずからに装着させる起点を意味している。それはさらに言えば、究極的には、自己の存在を確認する作業であり、だからこそ、その存在を〝実現〟として立証する作業のはじまりであつただろう。それはまさしく、〝政治〟のはじまりであつた。なぜなら、政治が歴史を画期するのは、常に、人間が自己の存在規定を問題にしはじめたときであつたからである。それを〝現象〟と見るか、現象の奥に本質を見ようとするかで、考察者の政治学は異なる。

※　※

私の政治学の転回は、人間を国家に連結した、その前提をはずすところからはじまつた。それがどんなにザインとして普遍的で一般的であろうとも、それをそのまま前提とする〝政治〟学は、私の政治学的思考を偏頗なものにする。歴史に胎動する人間にたいする評価をともなわない、この時代の政治学は私をかり立てない。つまり、人間が人間であろうとするいとなみへの接点は、栗原彬の仕事（たとえば『管理社会と民衆理性』、『歴史とアイデンティティ』新曜社）や馬場伸也のそれ（『アイデンティティの国際政治学』東京大学出版会）に触発されている。

それを支えた私の風土は、おそらく、先進諸国における〝参加革命〟であつた。さらには、五〇年代末から六〇年代にかけて、私が

直接経験したキング牧師にひきいられた黒人公民権運動にそれは遠因している。それは法制度的秩序と社会秩序の無限の乖離を明らかにしたし、その無限乖離にいどむ人間のこれまた無限の格闘に秘められた栄光と悲惨を表示していた。ベトナム反戦・青年の反乱・女性解放・エコロジー運動と連結してゆく人間の動きの中で、ザインとしての政治、つまりは人間の深奥にまでゆきつかずにはおかぬ政治が、誤りなく私の眼前に突出し聳立していつた。だが、政治学はどうしてもそこにとどかない。

一見すれば、行動科学としての政治科学は、人間を知るための可能な方法を備えていたかに思われた。だが、そこでの〝可能性〟は、未知を既知に転換する点で、きわめて時代的領域的に限定された「西欧近代科学」的方法にすぎなかつた。つまり、無知を未知に意味的に転換する認識的方法において、それは意義をほとんどもつていなかつた。（この点については、拙論「戦後世界の組替え」・『政治学と現代世界』御茶の水書房所収を参照されたい。）この意味で、政治学は方法論を推敲してこなかつたのだ。私はこの観点を突破しなければならぬ課題を負う責務を思つた。

そのために構築さるべき方法は〝状況の論理〟に支えられるものであつてはならない。また、これまでの〝客観的〟政治学での概念であるわけにはゆかない。というのは、人間が〝歴史〟を創るその契機を重大としなければならないのだし、またある人間集群をとらえながらも、そこに在る人間がだからこそ個性的に存在するさまを意味づけねばならないからである。それはR・ウィリアムズが「キイワード」として提出した〝ことば〟による以外にはなかつた。

ウィリアムズは、それに次の二つの関連した意味をもたせている。一つは、「ある種の諸活動とその解釈において重要な結合語になつている」ことと、他の一つは、「ある種の思想様式において重要な、示唆的なもの」である点である。（岡崎康一訳『キイワード辞典』晶文社。）私が、人間の意相と歴史の位相とを共に含みこむためには、ヘーゲル的意味をもはなれた知的作業の方法としてキイワードによるべし、と思い切つたのは、政治学の《科学化》（それは〝魂なき技術学〟に通ずる可能性を示している）の断ち切りへの要請を心にきざんだからである。

キイワードとしての〝アイデンティティ〟に、私はかなりの時間をついやした。だが、それは人間の内心における歴史の探索によつて自己を晶結するポイントに力点がかけられるように思われる。その晶結過程において外に発現するベクトルを自己同一化のそれと言えることも私は知つている。だが、その遠心ベクトルのゆく先はどのような人間状況なのか。アイデンティティは、既成の組織態からの離脱を前提としうる、一つの近代ではないのか。むしろ、近代は、人間の集合態をもう一つに考えることではなかつたのか。その集合を、人間を抑圧する性向を本質的にもたない意味で、想定することこそが、現代における近代の意味ではなかつたか。政治学に必要なキイワードは、そのようなものとしてのみ、現代に提出されねばならなかつたはずである。本来は人類学の用語である「エスニシティ」を政治学化することを考えたのには、こうした私の思考過程が

あつたのだ。

※　※　※

ここでとりあげた「アメリカ民族文化の研究」は、六人の日本人、三名のアメリカ人人類学者による五篇の調査研究と編者による理論的序論および総括論文の二篇よりなつている。したがつて、本書は、人類学（社会学を含む）の概念としての「エスニシティ」による研究業績という点で、私にとつては、直接の対象ではないかもしれない。ある意味では、本書は、私に素材を提供しているとも言える。だが、このキイワードは、私がかつてそれを用いて民主主義の論脈を形成したことがあつても、（『民族の基層』・三嶺書房、一九八三年）今なおほとんど注目されることがない。

私にはそれが、単一民族国家としての国家日本が、日本帝国の支配者層によつてつくられた〝統治の秘薬〟であり、戦後の今もなお持続している、その呪縛力の効果としか思えないのである。それは別に、私が先見の明を誇るのでも、政治学における有意性の独占を主張するものでもなく、ただ時代認識として共有する場の狭小を嘆ずるだけのことである。非専門者としての私が本書をとりあげる意味は、かかつて、人間存在の多先性の強調と、それを前提とした人間集群のありうべき民主主義的合意形成の理論的現実を探らんがためであることを明らかにしておきたい。

※　※　※　※

「個々の民族による情況のちがいはあるにしても、これまでも〝文化的実体〟として存在していた筈のアメリカの〝民族〟が、一九七〇年代に入ると新しく脚光をあびてきたのは何故だろうか。」（一一頁）

編者綾部恒雄がこのように投げかけた問題状況は、〝価値体系の多元化〟をその現代的特性とした高度産業社会の社会的位相を衝くグローバルな象徴的意味をもつていた。つまり、その多元化の契機は、かつて文化革命ととらえられたように、階級革命のそれによるのではなく、むしろ「現実の世界の動きは、社会階級的な差が相対的に減少をみせているのに反して、民族的なものへのアイデンティティは明瞭に残り、より自覚した形に強められてきていることを示唆している」（一二頁）ところに求められよう。その場合の〝民族〟は、国民に統合される以前の人間集団の統合原理ではなく、統合された国民の中から、より確実で本質的な人間の集合原理として析出してきたものであつた。すなわち、再発見された民族だつたのである。そうした〝民族〟をエスニシティとよんだのであつた。

綾部教授はN・グレイザーによつて、「ひとつの共通な文化を意識的にわかち合い、何よりもまずその出自によつて定義される社会集団」とそれを規定しつつ「〝人種〟は形質的なちがいによつて集団を分ける言葉であるが、〝エスニック〟な集団は、文化的な要素の他に、出自を共通するという意味で、推測上人種的にも共通性をもつことが期待されている」（一三頁、傍点＝内山）と指摘して、その特性を抽出している。だからこそ、「〝エスニック・グループ〟とい

う語は、既成の民族集団に限定されて用いられているのではなく、一定の社会＝文化的条件のなかで、常に再生産されるものと位置づけられている」とよどみなく続けることができるのである。

このエスニシティが、国家に挑戦を開始している、という現実が限りなく私の関心をそそる。そこでは、戦後世界にあつて旧植民地新興諸国が、ファーニバルが指摘した民族的複合社会をいかにして国民的に、つまりは国民国家的に一元的に統合するか、にさらされていた国家形成の原理にたいする自己否定があつた。民衆の忠誠を求めて、国家と民族が対立する状況は、綾部教授が指摘したように、「これまでは、ヨーロッパにおけるキリスト教のように、国家による忠誠の要求に対して最も強い反対をとなえてきたのは宗教であつたが、宗教の相対的没落によつて、文化的協同体としての民族の力が浮上してきたとみなすことができそう」（一六頁）というところまで、認識を深めねばならなくなつたのである。

一方では、産業社会の高度化が、階級という文化的実体にたいするアイデンティティの希薄化をもたらした。とすれば、自己を帰属すべき他の文化的実体を求める状況が、先進諸国民の間に発生しないわけにはゆかない。言いかえれば、国民形成の前と後ろのところで、〝民族〟が噴出している状況は、同時代的現象として、人間的にその本質が通貫している、と考えてよろしいのではないか。グレーザーが、「国家よりは小さく、家族よりは大きい」規模の人間集群の意味を現代的に説いたのは、この文脈で正当である。そして、綾部教授が、「現代の人びとの原初的愛着という感情を基礎にもつ民族が、一国の政治を左右し、国際的紛争を惹きおこすほどの勢力をおびてきていることは否定しえない事実」（二〇頁）と衝いたことがらが、政治の世界を動かす基礎エネルギーとしてとらえなおされねばならないのである。

アメリカにおける〝文化〟の問題が、いわゆる「るつぼ（メルティング・ポット）」論に対する反論として提出されていることは言うまでもない。（たとえば、鶴木真『日系アメリカ人』現代新書参照。）しかし、この反論は、ただちに各民族文化の主権的独立性主張に等置することはできない。そこには依然として、〝同化〟への意思がわだかまつている。この〝わだかまり〟は、本書の全章を貫く調査上の発見事項である。たとえば、第四章で考察されたタオスのスペイン語系アメリカ人の場合、その下に五種の集団があり、そこには階級差と対外態度差による分裂を認めねばならない。それは民族集団としての紐帯成立をはばんでいる。さらに、「民族集団を核として抵抗運動を展開できる時代は終り、民族差をこえて人々が共通の目的のためにつながる市民連合の時代に入つた。この市民運動の究極の目的は環境保護である。この運動に加わる人々はタオスの美しく、人間的な環境を守るために民族差を度外視して集まつている」（一三三頁）との指摘は、エスニシティと郷土とのかかわり方のありようを示唆している。

第三章で読みとられるインディアンの場合は〝部族〟の存在の意味を考える上で、示唆されるところが多い。とくに、〝歴史的経験〟の差が、大きく彼らのアイデンティティに影響するし、各集団関係の変化によつて、自己が所属する集団イメージも変化する、と

の発見は、エスニシティの流動状況を明らかにして、理論化の素材として貴重である。

その意味で、あるいは別の意味で、第七章でのフランス系アメリカ人の言語・信仰・家庭を拠点とした歴史・文化的凝集性と、七〇年代における言語と信仰の衰退が、逆にアイデンティティの高揚を示す事例に関心が集まる。つまり、同化を否定し孤立することで維持された文化的純粋性が、同化圧力を媒介にしつつ、「その留保の部分（フランス系）を大切なものとし、誇りをもつて、アメリカ社会を、文化を、より豊かにすることができる」（二七九頁）ところに展開されたとき、偏見と差別の用語としての「フランコ・アメリカン」が、遅れてきたエスニシティとして、「緩やかな多元的統合」の中に、自己を位置づけるにいたつた。

日系アメリカ人についての調査や研究は非常に多い。本書でも、第五、六の二章がそれに当てられている。（第六章は、日系と韓国系のシカゴ地区の事例研究である。）私には、ここで指摘された三世による民族文化創造に関心があつた。執筆者江淵一公教授の指摘によれば、「日系人は、ポーランド人とほぼ同じころの移民であるが、人種的には白人社会の埒外にあつて『アメリカ社会のマイノリティ』として特別視されながらも、近年白人社会への同化が著しく進み、『モデル・マイノリティ』と呼ばれるに至つた集団」（一四〇頁）であつた。さらに「比喩的に言えば、二世たちはきびしい人種差別的条件の中で、アメリカ社会の頂点によじ登ろうと努力したが、そのとき多くの固有の文化遺産という中身のいつぱいつまつたリュックサックを背負い切れず、文字どおり〝お荷物〟として放棄してしまつた。身軽になつて頂上をきわめたのは良いが、気がついたら、頂上で必要な自前の品物を何一つ持つておらず、先に来ていた白人から品物を分けてもらうしかなかつた。」（一九一頁）三世が出発したのは、まさにこの〝手ぶら〟の状況であつた。だが、彼らの手は何をもつべきなのか。それは、伝統文化としての日本文化ではありえないことを、彼らは知つている。それは彼らが創造した日本文化、つまり「日系アメリカ文化」でなければならなかつたことが重大なのである。

江淵教授は、次のように指摘する。「三世のそれは、すでに相当深くアメリカ主流文化に同化した段階での民族文化である。それは『生活実態としての文化』ではなく、『象徴としての文化』であり、しかも、現在、目的意識的に発展への努力が続けられている意味では、『イデオロギーとしての文化』と呼ぶにふさわしいものかと思われる。」（一九六頁）

※※※※※

本稿は厳密には紹介ではない。私自身が〝日本人〟ということがらにこだわつて生きてきた、その中で《人間たらんとする意思のあらわれ》として政治を考えようとしてぶつかつたものを、私流にとりあげたにすぎない。したがつて、本書の諸論考についての言及はきわめて小部分にしか及ばなかつた。しかし本書は、政治学にとつて、結衆の原理、イデオロギー、利益、感情、理性といつた、すぐ

れて現代的な問題のありようを明確にしていることを指摘しておきたい。

人間から発した〝時代精神〟をとらえる作業は、社会科学にとつてまことにむずかしい。だが、それを感受しなかつたところに、現在の社会科学の崩壊があり、その組み直しの契機に、エスニシティという、むしろ非合理的なモメントを定位しうるとしたら、政治学はまだしも幸運なのではないか。というのは、他のソリッドな社会「科学」と異なり、政治学はまさに、このような《人間》に思念を凝結することをもつて、その生命力としてきたからである。

さらに、人間が生きる、生活するということからの意味が問われねばならないとき、政治学は、学問における理性と経験の意味をもまた問い直せる契機をつかもうとしているのではないか。本書で〝人間生活〟を素材的に見れば、なお私たちは人間にさまざまな可能性を思い信ずることができよう。私はそういつたたぐいの〝研究〟が、人間の現在にかかわつて提出されることに、言いつくせぬ充足を思うのである。（弘文堂・一九八二年刊・A5版三一〇頁・四二〇〇円）

内山　秀夫